

泉鏡花「年譜」補訂 (十八)

吉田昌志

本稿は、先年刊行した岩波書店版『新編泉鏡花集』別巻二(平成十八年一月二十日)収録の泉鏡花「年譜」の補訂で、本誌七九五号(平成十九年一月一日)掲載の「補訂(一)」、七九七号(平成十九年三月一日)掲載の「補訂(二)」、八一九号(平成二十一年一月一日)掲載の「補訂(三)」、八二二号(平成二十一年三月一日)掲載の「補訂(四)」、八二六号(平成二十一年八月一日)掲載の「補訂(五)」、八四三号(平成二十三年一月一日)掲載の「補訂(六)」、八四五号(平成二十三年三月一日)掲載の「補訂(七)」、八五〇号(平成二十三年八月一日)掲載の「補訂(八)」、八五五号(平成二十四年一月一日)掲載の「補訂(九)」、八五七号(平成二十四年三月一日)掲載の「補訂(十)」、八六二号(平成二十四年八月一日)掲載の「補訂(十一)」、八六七号(平成二十五年一月一日)掲載の「補訂(十二)」、八六九号(平成二十五年三月一日)掲載の「補訂(十三)」、八七九号(平成二十六年一月一日)掲載の「補訂(十四)」、八九一号(平成二十七年一月一日)掲載の「補訂(十五)」、九〇三号(平成二十八年一月一日)掲載の「補訂(十六)」、九一七号(平成二十九年三月一日)掲載の「補訂(十七)」に続くものである。

内容は、「誤記・誤植の訂正」、「本文の訂正・追加」、「典拠の訂正・追加」、「新たな項目」、の四部に分かち、書式を次の通りとする。

- 一、表記は、原則として右「年譜」に準じた。
- 一、「年譜」本文の後に、【典拠】として、文献の原文、未公刊資料の翻字等を示し、典拠が複数の場合は番号を付して併記した。【注記】の項には、内容の解説、考証等を記した。
- 一、引用文の仮名づかいは、原文のままとし、字体は概ね現行の印刷文字に改め、読解に必要なルビを残した。傍点、圏点は概ね原文のままとした。
- 一、引用文の中略部分は、総て「(…)」で示し、前略、後略はいちいち断わらなかった。引用文の誤記・誤植は、「」内に補止した。
- 一、典拠文献が複数項目に重出する場合も、そのつど項目ごとに示して、書誌的事項の記載を省かなかった。
- 一、「本文の訂正・追加」では、訂正部分、新たな追加部分に傍線をつけて区別した。
- 一、文中の敬称は、原則として省略した。
- 一、必要に応じて、「*」のあとに注記事項を補った。

【本文の訂正・追加】

明治三十五年（一九〇二） 壬寅 三十歳

一月 十二日、午後、きたる十五日の新年会の件で幹事の柳川春葉に代って、紅葉宅へ打合せに行った。辞去後に、年賀の後藤宙外を迎えた紅葉は鏡花を招いたが、不在だったため宙外と二人で明進軒に会食した。この日、紅葉は春陽堂新刊の『三枚続』（一日発行）を受取った。

【典拠】尾崎紅葉「十千万堂日録」（岩波書店版『紅葉全集』第十一巻、平成七年二月二十六日）

〔明治三十五年一月〕十二日 晴。寒からず。(…)午後鏡花来る。来ル十五日忘年会の相談にて幹事柳川の今年は年賀にも来らず小栗も同然なる故に彼に代理せしめ打合せを為す。筆買ひに出でんとすれば宮戸座の花房柳厩（つばき）来訪。金色夜叉を二月狂言にせんとて稿本借りに来れる也。後藤宙外子大串柿持参年賀。使をして鏡花を招かしむ不在也。宙外子と明進軒に会食す味好からず。二女に一円傭人に一円の年玉出す。(…)初刷雑誌。団珍。少年世界。太陽。太平洋。初冠。新小説。文芸。小天地。学燈（くが）（丸善）歌舞伎。小柴舟。俳諧評論。教育界。中央公論。X。単行ははやり唄。三枚つゞき。短慮之刃。

【注記】

「年譜」では「十千万堂日録」に拠り、新年会打合せの件のみを記したが、同日の他の記載を見過していたので補った。

この日紅葉宅に届けられた春陽堂新刊の『三枚続』、小杉天外作『はやり唄』、自著の『東西短慮之刃』は、三冊とも同じ一月一日の発行である。「十千万堂日録」に記載を欠くが、『三枚続』の題簽は字体からして紅葉の染筆である公算が大きいので、春陽堂がこれを届けたものであろう。

なお、拙稿「泉鏡花と演劇」（『泉鏡花素描』和泉書院、平成二十八年七月二十五日）において、「湯島詣」初演（大阪朝日座、明治三十九年九月）の際に、「三枚続」から紋床の職人「火の玉愛吉」のみを取出して絢交ぜにした脚色が、以後明治大正期の「湯島詣」劇の定型となり、昭和十三年七月の歌舞伎座公演（伊井蓉峰七回忌追善興行）でようやくこの絢交ぜが解かれた経緯を「鏡花もの」上演の諸相（一）「湯島詣」の「塗りかへ」の節で述べたことがある。「三枚続」単独の公演は鏡花歿直後の昭和十四年十月明治座興行（巖谷三脚色・久保田万太郎監督）である。

「三枚続」の女主人公お夏のモデルに樋口一葉が指定されることについては、つとに須田千里氏「一葉から鏡花へ―『わかれ道』と『三枚続』『式部小路』―」（『光華女子大学研究紀要』二十八集、平成二年十二月十日）に詳細な分析があるが、須田氏の指摘以外に同時代においてもその評判が立っていたことを「鏡花のなかの一葉―『薄紅梅』を中心として―」（前記『泉鏡花素描』）の「追記」に触れた。併せて御参看いただきたい。

明治四十三年（一九一〇） 庚戌 三十八歳

一月 二十八日、石橋思案に使を出し、喜多村緑郎の招きで京都に漫遊することを告げた。

この日、京都西石垣千茂登から、喜多村緑郎と連名で笹川臨風宛に葉書を出した。

二月 この滞在中、矢橋小葩に主賓として招かれた宴（四糸繩手美濃庄）

には京都在住の文士画家も加わり、同席の喜多村とともに句を吟じた。七日、京都から帰京した。帰京後、京都の喜多村緑郎宛に書信を送り、これを「千鳥様」と題し、「新小説」三月号に掲げた。

【典拠】小葩吟客「喜多村の噂」（『満洲日日新聞』大正五年八月三日付・五面）*活字

の大きさは均等とした。□は判読不能。

■喜多村は愈よ歌舞伎座に来る事となった。彼の奥行の深い芸風は、大連観客の心をチャームせずには置かぬ。喜多村は何と云つても新派劇壇の大立物である。大連劇壇あつて始めて大芝居が見られる訳である。

■私が喜多村緑郎と舞台以外に知つたのはもう十年前の昔である。その頃私は東京で歌舞伎に關係し『演芸』を主宰してゐた。関根黙庵、泉鏡花、井出蕉雨、山岸荷葉、鈴木春浦君等の交友厚かつたので、それ等の人の紹介で、新旧役者と往復するやうになつた。喜多村と知り合つたのも丁度その頃で當時喜多村は根岸に家を持つてゐた

■その頃、同じく知り合つた俳優——今の幸四郎や河合武雄などの、心にも無い世辞を云つて、只管私達の顔色を窺ふ卑しい肌合の役者計りの中に、喜多村のみは、全くの書生肌の竹を割つたやうな氣質が、私の心に非常な快感を与へた。そして喜多村は俳句や江戸小唄の趣味もあれば、鏡花張りの文章や小説の一つも書くので、当時鏡花宗であつた私と喜多村とは期せずして趣味が一致した。そしていつとはなく漸次接近した。(…)

■四十二年十一月京都に帰省してゐると、道頓堀に出勤してゐる喜多村から『京と大阪とは目と鼻の先きでありながら、一度位顔を見せてもよささうなものだ。天王寺の紅葉寺で怪談会を催すから、是非出席して呉れ』との手紙に接した私は、寒い日も厭はず大阪迄遊びに出かけた。何でも木枯の吹き荒む晩だと思つてゐる。道頓堀の朝日座で芝居のはねるのを待つて、喜多村と紅葉寺に俣を走らせた。大阪の文士画家新聞記者が多数集つてゐた。越えて四十二年二月、京都南座に乘込み伊井の武男、喜多村の浪子で『不如帰』伊井の長兵衛、喜多村の権八で『鈴ヶ森』を演じた時、喜多村は私を訪ねて、泉鏡花君の入洛を報じた。鏡花君は態々喜多村の芝居見物を兼ねて初春の京の

情緒を味ふべく来たのであつた

■鏡花君を主賓として喜多村の二人を繩手の美濃庄に招待した事がある。京都の文士画家もそれに加はつた。種二、岸勇、美代治、梅勇など美しいの呼んだ。華やかな電燈の下に、可愛い綺羅美やかなのが人形のやうに□並んだ。加茂川では時折千鳥がチチと鳴いた。

■『はかない恋を、怨みわびて死んだ舞妓の精は、千鳥になると云ひますね』と鏡花君が云ふと、舞妓達は水でも浴びたやうに感じたか、襟を搔き合せてお互ひにゐざり寄つた。山寺の鐘の音が、春寒の加茂川に伝はつて淋しく流れた。その夜の光景は今も忘れられぬ、その夜の句

抱きしめて逢ふ夜は雪の積りけり 鏡花

春の夜や写真で見たる芸妓たち 緑樹

など記憶に残つてゐる。

■喜多村と別れたのは、此の夜の会合があつてから数日の後であつた。爾來七年、西と東に相離れて、更に相まみゆべきよすがも無かつたが、今回ゆるりなく彼の舞台をも大連で見るとなる。彼も私が大連にゐて、而も新聞記者をしてゐやうとは夢にも思はぬであらう。

【注記】

「年譜」では、田中勲儀氏「祇園物語」の成立過程—泉鏡花と京都」（『泉鏡花文学の成立』双文社出版、平成九年十一月二十八日）の考証に基き、一月二十八日の出京から二月七日の帰京までの経緯を記したが、このかんの招宴に関する回想文を見出したので、これを補つた。

典拠文の筆者「小葩吟客」が矢橋小葩であることは吉田遼人氏「吉田初三郎の演芸雑誌『演芸文庫』—尾崎紅葉、小川未明らの逸文にふれつつ—」（『日本近代文学』九十七集、平成二十九年十一月十五日）により教えられた。

喜多村緑郎は浪子夫人同道で一座を率いて、大正五年八月三日に門司から哈爾賓丸で大連着、当地の大連歌舞伎座において、五日に「俠艶録」で初日の幕を開け、十三日から「瀧の白糸」の通し、二十七日から「婦系図」の通しを出し、九月五日からの「雲の響」を最後として、十四日に夫人、市川菊子（市川久女八の養女）とともに帰国したが、門下の花柳章太郎、藤野秀夫、雪岡光次郎、若井信男らはなお残って興行を続け、二十七日に引揚げた（以上「満洲日日新聞」の記事による）。この大連興行については花柳章太郎の『がくや緋』（美和書院、昭和三十一年十月二十日）の「満州」「赤い蛇」「滝の黒糸」の各章に詳しい。

矢橋が主宰していたとする雑誌『演芸』は第二巻第一号（明治四十一年一月一日）のみを確認しているが、奥附に発行所が斯文堂書房（東京市日本橋区通四丁目四番地）、発行兼印刷人今尾捨太郎、編輯人石原烈とある。本誌広告に「眠れる芸壇を覚醒すべく大使命を帯びて生れ出でたる、我『演芸』は、旧臘十一月を以て其の第一号を出版するや、我邦雑誌界に於ける破天荒の盛況を以て江湖の大喝采を博し、発刊後旬日ならずして、忽ち売れ切れたるは、吾等同人の深く感謝に耐へざる所也。」云々とあって、創刊が四十年十一月だと知れる。小説欄には山岸荷葉作・鏗木清方画の「明暗」とともに、小葩吟客の「紅林檎」が掲げられているが、鏡花と本誌との関係はこの号のみでは審らかにしえない。矢橋小葩の事歴とともに今後の課題としたい。

引用末尾、宴席で吟じたという「抱きしめて逢ふ夜は雪の積りけり」の句は春陽堂版全集に未収録、岩波書店版全集の巻二十七に収められている。

明治四十五年・大正元年（一九二二） 壬子 四十歳

十月 二十二日、生田葵山宛に、きたる三十日開催の紅葉山人十週年忌の案内状を送った。

この前後、福岡在の久保猪之吉にも案内を送り、同夫人より江宛に、紅葉忌の通知（三百枚印刷）の差出しと、紅葉存命中の住所録に夫猪之吉の名が記されていたことを報じた。

【典拠】久保猪之吉「紅葉の十年忌に」（「福岡日日新聞」大正元年十月三十日付・四面）

* 写真（紅葉書簡）の引用を省く。

まことや歲月人を待たず、紅葉山人逝いて十年となりぬるか。数日前山人門下の数氏連名の通知状来れり。それと前後して泉鏡花氏より予の妻に宛てたる私信あり。中は曰く『此三十日紅葉期^{マキ}相営み申候につき通知さし出し候念の為芝より先生御存生の頃おちかづきの方々の所がき一帳かりて参り候くり返し申候うち丸山新町二十番地おすまるにて御主人様おん名見え申候おなつかしく存じ候、通知はみなにて三百枚おんまへ様に御目にかけ候と京都の喜多村とのほかは残らず東京と横浜ばかりに候』と。

予と紅葉山人とは時代も異なり又職業も異なりしが種々の連鎖にて相識る中となりき。予の紅葉山人に始めて逢ひしは新潟の裏町に於てなりき。当時予は廿六歳の大学生にして角帽短袴、新しき歌道を弘めむとの大望を抱き單身北陸佐渡の地を巡回せし時なり。山人は文壇の驍将として名声赫々、読売紙上に煙霞療養をもせられし時なり。佐渡ヶ島に於て巡遊時を同うせし関係は予と山人との中を結びつけたる最初の連鎖なりき。

予は大学卒業後、間もなく官命に接して留学の途に上る事となれり。予の暇乞ひに山人を牛込区横寺町に訪れし時、山人恰も不在なりき。その翌日の夕方^{タタ}にいたりて山人より長き懇なる書簡あり。此書簡の中にはいふべからざる熱情と訓戒とあり、予をして山人を永久に忘れ能はざらしむるものは、実に此書簡あるが為なり。予の滞欧中、山人の書簡集発刊せられたる由、此書簡は勿論洩れたり。今山人の十年忌に際し、此の書簡を手に入れば感慨無限

なり。全文を掲載して世人と山人の訓言を分たむ。

* * * * *

然者先般は御はがき被下海外御留学との御事学者の本懐何事か之に過ぎ可申御好運の義欽羨に不堪候別而此の難症に呻吟候身には胸臆の中謂ふべからざる者有之候成功は寿久しきに有之候事を晝〔禱〕り候小生には御身の御自愛をのみ祈望してやまず候過度の勉強など尤もよろしからず坦途を徐歩する如き御體度にて優々御研学の義願上候

昨日は又御繁劇中わざ／＼御責臨被下候処いつもは幽居罷在候に昨に限り久しぶりにて外出候処へ御出は遺憾の極みに御座候病中の事故御暇乞ひにも不得参候

小生幸ひに命も有之候はゞ新橋停車場迄御歓迎にも可罷出候へども従是一別万古茫茫なるやも難測佐渡には一足先に旅行いたし候某なれど此度は学兄の為に壯遊を先んぜられ候事かへすゞも残念千万に御座候

航行中御筆ついでは時々御消息御聞せ被下度又彼地に御着の上は絵はがきども賜はり度枕上の楽みに相待申居候成効は命長きに在る事を忘れたまふべからず養生の法は申す迄も無くあせらざるに有之適宜の御勉強こそ望ましく存候（久保曰く○点は原文の儘）

別紙は病中記念として作り候ふ絵はがきに有之本月末ならでは出来不申幸ひ只今製版見本として一葉参り候ふ間座右に献じ申候御笑留被下候はゞ幸甚に御座候

かゝる時こそげにぐ命をしく候御帰朝後の久保君が見たく万感鍾りて難禁候

六月十九日

尾崎 徳

久保雅契 座下

文中『佐渡には一足先』云々とあるは予の佐渡に入り草鞋がけして夷、中山、

相川と別行せし時山人は南端小木港にあり、やがて新潟に帰られき。予が新潟に帰着せし時、山人は既に帰京の途に就かれむとする時なりき。これをい

ひたるなり。『従是一別万古茫茫』とは何等悲壯の言辞ぞや。『別而此難症に呻吟候ふ身には胸臆の中謂ふべからざるもの有之候』に山人既に不治の症たる胃瘻たる事を知られて後の事なり。『かゝる時こそげにぐ命をしく候』と

読みて予は涙に咽びたり。予が独逸留学地フライブルグ市に到着せしは此年

即ち明治三十六年八月廿日のことにして、異境の風物未だ身心に調和せざる十一月の霜の朝、山人の訃報は既に達しき。予は此時携へ往きたる山人の書

簡を取り出して又泣きたり。『成功は命長きにあり』と戒められし言は山人一生の経験を結晶せしめたる金言なりと感じ、居常坐臥深く戒めたり。

玉摧蘭折、何の恨事ぞ、天才早く逝きて驚馬常に残る。故人の書簡に対して恥づる所多し。

世上の天才、君子願はくば山人の此訓言に対して戒むる所あれば余の悦ひ何ものか之に過ぎむ。故人の十年忌に際して未刊の書簡を世に紹介し故人の霊を弔ふ。（大正元年十月廿七日千代の松原に於て）

【注記】

典拠に関する情報は『近代文学研究叢書』第四十五卷（昭和五十二年七月二十日）の久保猪之吉「著作年表」に載っているものだが、同じ巻の泉鏡花の「資料年表」には記載をみない。

鏡花の久保より江宛書簡（の一部）のみならず、尾崎紅葉の久保猪之吉宛書簡が紹介されており、それぞれ『鏡花全集』『紅葉全集』に未収録なので、全文を引用した。

文中引用されたより江宛書簡にもあるように、紅葉十周年忌開催通知の差出し

に当って、故人の住所録を檢めたところ、久保猪之吉の住所が控えてあったため、鏡花が夫人にこれを報じ、猪之吉は「十年忌」にちなんで紅葉との旧縁を綴ったのである。鏡花書簡中に「芝」云々とあるのは、紅葉歿後、横寺町を引払った未亡人が実家の芝区新堀町（二十五番地榎島直二郎方）に移っていたからである。

「予の暇乞ひに山人を牛込横寺町に訪れし時、山人恰も不在なりき」を「十千万堂日録」に就いてみると、明治三十六年六月十八日に「不在中独逸留学の為久保猪之吉氏留別の為来訪。」とあり、猪之吉宛書簡はその翌日に認められたことになる。続いて二十一日に「午後久保の吉氏より留別写真贈来る。」ともある。

留学前の住所は「帝國文学会広告」（「帝國文学」八巻第九、明治三十五年九月十日）に「新入会員／本郷区丸山新町二十番地／医学士 久保猪之吉」と出ているので、鏡花の記述の通りであることが判る。

なお、より江宛書簡の中に紅葉十周年忌の開催通知の印刷枚数が「三百枚」だったことも記されていて興味深い。

鏡花の生涯においては、小村雪岱との出会いの機縁を作ったことで知られる久保夫妻だが、一門下生「思ひ番町の先生」（鏡花全集月報「四号、昭和十五年七月」に「久保猪之吉博士も先生とは年来の御親友だった、殊に奥様のより江様は、娘時代からの鏡花信者で、久保博士と先生の御親交は奥様の御紹介が最初だったと記憶する」とあるものの、両者の直接的な交際がいつから始まったのか、分明ではない。鏡花から久保より江宛書簡は、明治四十三年六月一日付の土手三番町から下六番町への転居通知（葉書）と、年次未詳の「通夜物語」上演に触れた書簡下書（No.57）があるが、これらも交際の開始時期を示唆する内容を含んでいないのである。

より江自身の文章では「新小説臨時増刊 天才泉鏡花」号（大正十四年五月二日）掲載「お作のなから」（のち「鏡花の女」と改題して『より江句文集』京鹿子発行人所、昭和三年五月八日、に収める）が最もよく知られているが、「思ひ出すまゝ」（「新小説」

三十一年四号、大正十五年四月一日。同じく『より江句文集』収録）では、明治大正の女流文学を回想した中で、一葉に触れて「当時唯一の競争者として、一葉女史をめぐっていらしたといふ事」を「鏡花先生から伺った事がある」と記している。

しかし、より江はひとり愛読者たるにとどまらず、鏡花作品の素材ともなっていることの指摘がすでにある。池上不二子「萩芙蓉―久保より江―」（俳句に魅せられた六人のをんな）近藤書店、昭和三十二年二月二十八日）によれば、「鏡花の小説「櫛巻」と「星の歌舞伎」とは、共により江夫人をモデルとして書かれたものである」。みずからを「針でつゝいた一滴の血にも足がふるえ、絵や芝居の幽霊に数日おびやかされる臆病者の私」（「一生の願ひ」『より江句文集』）とも言っている彼女は、「櫛巻」（明治四十三年十一月）の「夫人」や「星の歌舞伎」（大正四年五月―十二月）の清川夫人「照樹」の人物像とはかなりの隔りがあり、今後の具体的な検討を要するものの、女主人公の設定に際してより江のそれを活用していることは動かないだろう。

なお、村松定孝編『泉鏡花事典』（有精堂出版、昭和五十七年三月十日）中「鏡花小説・戯曲解題」の「櫛巻」の項に「題名は、東京にも名の聞こえた某公園（金沢の兼六園の想定）の松林の中の邸宅に住む病みがちの夫人が髪もあげず、櫛巻なところから名づけられている。」とあって、本作を「金沢もの」に解しているのは根拠が不明で肯えない。先の池上不二子の指摘からしても、また典拠文末尾にも記されているごとく、この「公園」はかつて博多湾に面する「千代の松原」として知られた名所で、久保猪之吉より江夫妻の居住していた「東公園」（現、福岡市博多区）の地が踏まえられている、とするのが妥当だと思ふからである。

最後に、鏡花愛読者の女流のうち、岡田八千代、長谷川時雨の肖像は多く目に触れるが、久保より江のそれは伝わること少ないので、参考までに、本項鏡花書簡発信のあくる年大正二年当時の「福岡日日新聞」の訪問記事（「応接室の婦人4

久保より江子」大正二年七月十九日付・七面)の写真を左に掲げておきたい。



(久保夫人と、愛猫と、掛巻) (久保夫人と、愛猫と、掛巻)

白い鸚鵡を愛玩するより江の姿は、大正元年十一月「中央公論」に発表の「印度更紗」の「夫人」を容易に想起させる。

「新たな項目」

明治三十三年(一九〇〇) 庚子 二十八歳

九月 八日付「都新聞」(三三三)で「たつみ巷談」に昨今の一問題たる娼妓自由廃業の件を書込んだ「深川児」の深川座上演が報じられ、さらに十一日付「東京朝日新聞」(四四四)には、同座一番目狂言「深川男」(七幕)の役割が載った。

明治三十五年(一九〇二) 壬寅 三十歳

二月 二十八日付「扶桑新聞」(四四四)に名古屋音羽座の一番目狂言「泉鏡花先生原作」の「深川ツ児」上演(二十九日より)の広告が載った。

【典拠1】「梨園叢話」(「都新聞」明治三十三年九月八日付・三三三)

▲深川座は内部を改革して大川「」石山、佐藤、山田、寺島等の新演劇にて開場する由狂言は一番目「深川児」中幕「雪月花」物にせんと相談中なるが深川児は例のたつみ巷談に昨今の一問題たる娼妓自由廃業の件を書込みしものなりと

【典拠2】「芝居だより」(「読売新聞」明治三十三年九月八日付・四四四)

◎深川座 は大川、山田、石山、佐藤、寺島等信友会一座の新演劇にて近日開場する事となり狂言は一番目「深川男」といふ名題にて娼妓自由廃業問題を当込みたるものを出す由

【典拠3】「楽屋すゞめ」(「東京朝日新聞」明治三十三年九月十一日付・四四四)

▲深川座は新演劇にて今十一日初日一番目「深川男」七幕、中幕雪月花(雪)武田猛護送(月)高山彦九郎(花)廓の鞆当にて役割は船乗宗平、留男鳶の佐七(大川)小間物売沖津、名古屋山三(石山)新造お重、高山彦九郎、不破伴左衛門(山田)子分嘉十、武田猛(佐藤)長屋女房おかよ、澤瀉源太(澤田)娼妓小蝶後にお君(石見)学生鼎 宗平女房お浪(山崎)米屋庄吉、宗平子分藤吾、魁の勘六(井口)書生虎尾、車夫竹五郎、巡查山口(加藤)志村豊壽、子分仙太(嵯峨)子分源次、巡查遠藤(和田)娘おそう、金棒引(いぬ丸)水屋久作、子分彌太郎(吉澤)女房おもん、仙太女房おかね(千坂)篠崎輝臣、弟作蔵(花山)等なりと

【典拠4】「興行案内」(「扶桑新聞」明治三十五年三月二十八日付・四四四)

常々三月廿九日 電話持
午後二時開場 八四〇
壹番目 泉鏡花先生 深川ツ児
原 作
貳番目 是 城 風

音羽座

【注記】

「辰巳巷談」上演に関して、原作名とは異なる類似の外題をもつ演目を見出したので、まとめて立項した。

典拠としての引用を省いたが、「歌舞伎」第七号（明治三十三年十一月十三日）の雑報「歌舞伎日記」にも「深川座にて演ずる深川児、青森の青森座にてブラックが演ずる吉原騒動は共に娼妓自由廃業を仕組しものなり」と報じられている。本作の上演史に関しては、植田理子氏「鏡花小説を上演する―明治三〇年代における「瀧の白糸」と「辰巳巷談」上演を中心に―」（泉鏡花研究会編『論集泉鏡花』第五集、和泉書院、平成二十三年九月二十日）に詳しいが、異題ゆえに深川座、名古屋音羽座の上演には触れておらず、また小宮麒一編刊『歌舞伎・新派・新国劇上演年表』第六版（平成十九年二月二十一日）にも、深川座の上演は記載されていない。

原作発表から二年後の明治三十三年は「辰巳巷談」劇が佳境に入った年と云ってよく、六月（二十二日初日）川上座で藤澤浅二郎らの「たつみ巷談」、七月（十四日初日）開盛座で中野信近らの「たつみ巷談」、八月（二日初日）演伎座で恩田五郎らの「辰巳巷談」と、月次の上演が続いていた。原作は、深川の船頭宗平が「親元身受け」の金を工面して廓を出られた洲崎の娼妓胡蝶（今はお君、これにお君の思い人の書生鼎、彼の実母沖津の絡む筋で、自由廃業の件は出てこないが、三か月連続の上演を承けて世上喧しい話題を当込み、新味を出そうとした脚色であり、この年十一月（二十九日初日）の宮戸座では、伊井蓉峰一座の「自由廃業」という外題の興行も組まれたほど、当時最も時事性に富んでいた。深川座を加えれば、「辰巳巷談」は実に四か月連続の上演になるのである。

明治五年の娼妓解放令が出てもおお奴隷状態に置かれていた娼妓であったが、三十三年二月二十三日、函館の娼妓（坂井フク）の廃業の訴えが大審院判決により認められて以来、自由廃業は吉原をはじめ全国各地の遊廓に波及し、深川座（深川

区富岡門前町四十四）地元の洲崎遊廓の娼妓（操こと安藤琴）の救助の申込みを受けた娼妓運動の中心救世軍の山室軍平が、同行士官とともに廃業の談判に出かけた帰り、暴漢に襲われ頭を割られるという暴行事件が起ったのは、「深川男（児）」開演の五日前、九月六日夜のことであった（山室軍平「洲崎暴行事件の顛末」『社会廓清論』警醒社書店、大正三年十月十九日）。

現在までのところ、最も早い上演が確められる明治三十二年七月（二日初日）の横浜鳶座興行（福井茂兵衛・藤澤浅二郎合同）以降、先にも述べたごとく原作題名通り「辰巳巷談」での上演も行われているから、この演目との関係を検討する必要があるが、「深川男（児）」の筋の詳細は不明である。鳶座の絵番附（早稲田大学演劇博物館蔵）と深川座のそれを比較してみると、「深川男（児）」の子分嘉十、娘おそう、女房おもん以外の主要な役（宗平、お君、鼎、沖津）は原作のままの名で、両者はほとんど重なっており、座員の多い鳶座では、座頭福井茂兵衛のための乞食頭穴熊、宗平一子宗吉（福井太一）等の加役がある。

典拠3の役割は姓のみで名を伏するが、諸書（田村成義編『続統歌舞伎年代記乾巻』市村座、大正十四年十一月八日・柳永二郎『絵番附・新派劇談』青蛙房、昭和四十一年十一月二十日・同『木戸哀楽―新派九十年の歩み』読売新聞社、昭和五十二年五月二十五日・岩井創造編刊『新派百年・俳優かがみ』平成二年六月十九日）から名を拾うと（登載順に）、大川七郎、石山猛夫、山田宗三郎、佐藤幾之助、澤田憲、山崎長之輔（モト蝶之助）、井口昇、加藤龍郎、嵯峨清、吉澤美之輔（美之助トモ）、千坂三郎、花山栄、となろうか。石見、和田、いぬ丸、は詳らかにしえない。さらにこれを川上座の配役（梨園叢話^{しやうえんそうわ}「都新聞」明治三十三年六月二十一日付・三面）と比較すると、山崎長之輔が両座ともに鼎役を勤めており、他の深川座出演者のうち、役割は異なるが、大川、石山、嵯峨、澤田、加藤、井口の六名が川上座にも出演しているから、この一座にとっては、原作の仕組みを過半の者が承知済みであったことになる。なお、典

抛2の「信友会一座」のうち「寺島」は川上座では新造お重を演じており、川上音二郎一座の寺島倉次郎かと思われるが、典抛3が報じた役割には名が見えない。

一年半後の名古屋音羽座の興行は八木書店版『近代歌舞伎年表 名古屋篇』第 四卷（平成二十二年三月一日）の典抛により確認した。引用を省いたが、同日の「新愛知」（六面）にも「扶桑新聞」と同内容の広告がある。右書には演者を「いろいろは会一座」とするが、引用の通り新聞広告には記載がない。おそらく「いろいろは会」が当時音羽座を常打ちにしていたことから記されたものであろう。

新派劇の「鏡花もの」上演における名古屋での興行の重要性については、拙稿「泉鏡花と演劇」（『泉鏡花素描』和泉書院、平成二十八年七月二十五日）でも指摘したところだが、深川座と同じ外題ながら、一座は異なっており、東京から名古屋への波及の実態も含め、演者、脚色の詳細は今後の調査を俟って明らかにしたい。

本項の「都新聞」「歌舞伎」の報、および横浜鳥座の上演については、梅山聡氏よりご教示を得た。なお、梅山氏には明治三十三年から三十六年にかけての「辰巳巻談」劇の地方公演について述べた文章（『万華鏡』『泉鏡花研究会会報』二十八号、平成二十四年十二月二十日）がある。

明治三十四年（一九〇一） 辛丑 二十九歳

三月 二十日、尾崎紅葉は春陽堂より刊行予定の『通夜物語』に題簽を与えた。

四月 十九日、春陽堂から『通夜物語』（装丁口絵富岡永洗、扉絵田代暁舟）を刊行した。刊行後、尾崎紅葉は裏表紙に署名して、大島太郎にこれを贈った（月日不明）。

【典抛1】尾崎紅葉「十千万堂日録」（岩波書店版『紅葉全集』第十一巻、平成七年一月

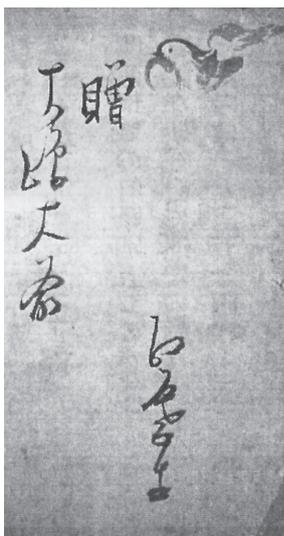
二十六日）

〔明治三十四年三月〕廿日 快晴。暖。正午起。微震あり。文科大學池田氏来る。春陽堂来る（通夜物語に題簽す）。（…）此日微風有れども日恬に、気暖にして、彼岸日和たるに負かず。

【典抛2】川島幸希「続署名本の世界21『誓之巻』『通夜物語』『菖蒲貝』献呈署名本」（『日本古書通信』七十巻三号、平成十七年三月十五日）

さて今回の二冊目の署名本は、紅葉が鏡花の『通夜物語』（明治三十四年・春陽堂）の裏表紙に献呈署名した珍しいものである。弟子の本に師匠が署名して寄贈することは少ないから、やはりそれだけ紅葉は鏡花を買っていたということになるのかもしれない。献呈先の大嶋なる人物は特定できないのでご教示願いたい。なお同じ口で古書市場に出品された大嶋宛『金色夜叉』前編の献呈本は署名が「十千万堂」となっていたので、この雅号の通じる範囲「困」の人物であることは間違いなさそうだ。

ところで署名は原則として見返しにされるものなので、それ以外の場所にあるとペタランの古本屋も結構見落としてしまうらしい。とりわけ古書市場では大量に本が出てくるので、丹念に一冊一冊チェックするのは難しい。そこで思わぬ掘出し物のチャンスが出てくる。大嶋宛献呈本に関しては、扉に献呈署名が書かれた『金色夜叉』はまだしも、裏表紙に書かれた『通夜物語』を発見するのは難しからう。そんな場所に署名するのは普通思えないからだ。



【注記】

尾崎紅葉の『通夜物語』への題簽については、すでに「通夜物語」のかたち（『泉鏡花素描』和泉書院、平成二十八年七月二十五日）にも触れたが、今回紅葉の献呈と併せて立項した。

先に『三枚続』（明治三十五年一月一日刊）の題簽を紅葉染筆と推定したのは、この『通夜物語』の先蹤があるからである。

典拠②にも指摘するように、裏表紙への署名は珍しいが、この異例はかかって表紙の題簽が紅葉自筆だったことに因るのにちがいない。表紙の表も裏も自らの染筆としてこれを献呈したのである。

当時紅葉の周辺で「大嶋（大島）」姓の人物は二人居り、一人は大島寶水、もう一人は大島太郎である。歿後の紅葉祭（第四回、明治三十九年十二月十六日）にも参加している大島寶水（本名貞吉。明治十三年八月二十五日生、昭和四十六年五月十六日歿。享年九十二）は「読売新聞」に在籍した俳壇担当の記者だが、紅葉より十三歳の年少、明治三十四年当時二十歳では「大翁」の語にそぐわない。

紅葉書簡の明治三十三年三月二日付の宛先人である大島太郎は、『明治過去帳』（東京美術、昭和四十六年十一月二十日新訂初版）に、

一元薬剤師試験委員正七位勳六等薬学士 東京府士族大島瑛菴の子にして大島汀の兄に当り母は太田氏慶応元年十一月十八日会津若松に生る卅年帝国大学薬学科を卒業大阪製薬試験株式会社技師長、同取締役、薬剤師試験委員等に歴任四十五年六月廿四日東京に病死す年四十八妻を直枝といふ

と出ている人物である。訃報（大島太郎氏逝く）「読売新聞」明治四十五年六月二十四日付・三面）には「廿三日午後一時遂に逝去せり」とある。同書簡を収める岩波書店版『紅葉全集』第十二巻の解題に「大阪在住の医家」とあるが、右の通り「薬剤師」が正しい。紅葉書簡を紹介した『紅葉より小波へ』（手紙研究会、大正九年十

一月一日）の巖谷小波の注にも「薬剤師大島太郎氏」と記されている。

紅葉と大島太郎との交際は「十千万堂日録」に明らかで、書出しの明治三十四年一月二日に「十時出蓐。大島氏来る」と年賀の記されるのが最初、以後七月まで、頻繁に横寺町を訪れては、神楽坂で酒席（多くは常盤と笹川）を伴にしている。「日録」八月五日には「午前大島氏出京中来訪」とあるので、このころは在阪だったと判明する。

「日録」に『通夜物語』贈呈のことは記されていないが、両者の交際の濃やかであるのは明らかであり、蓋然性は高いと判断した。典拠②に指摘のある『金色夜叉』前編の刊行は明治三十一年七月六日であり、このころにはすでに両者の交際があったことになる。

なお、署名の字は「大嶋」だが、訃報をはじめとする諸記事では「大島」であるのでこれに従った。

明治三十六年（一九〇三） 癸卯 三十一歳

七月 十五日、紅葉宅を見舞に訪れた。

【典拠】尾崎紅葉のおさだ／お夏宛書簡・明治三十六年七月十七日付（岩波書店版『紅葉全集』第十二巻、平成七年九月二十七日）

今ほどは遠方のところ御つかひ被下且つ何よりの御おくりものうれしく受納いたし候 えんうすき二人よりあゝいふ見舞物をもらふわけはないとおもふにつけ、それほどまでに心に掛けてくれるかとおもひ候へば、何ともいはれぬほどうれしさが身にしむやうに御座候。此の上ののぞみは一日も早く外出のできるやうになりて、金子あたりで大いに景気をつけ、一ばんくひあかすやうな元氣になりたきものに御座候（…）

一昨日いづみ来り候ところまだその後太田氏にあはざるゆゑ、両女のやう

すも聞かずとありしが、わたしのところにてはよほどさなぎのむしをおさへをりしことなればそれが太田氏方にてはれつし、大にぎやかなりしならんとさつせられ申候。さのじなどはさかんに大声をはつしてくるひ候事と目に見るやうに有之候（…）

今朝より三人の客来にてそのあいていたしすこぶるつかれ候ゆゑ、このへんにて筆とめ申候またおもひつき候事あらばたより可申、さよなれば御きげんよう商売繁昌に御在可被成候

十七日午後一時

あゝあつい

尾崎

おさださま

お夏さま

【注記】

本簡は、早稲田大学図書館「柳田泉文庫」蔵の「紅葉書翰未刊行」よりの採録。

この「紅葉書翰」は「柳田泉が未刊行の紅葉書翰を原稿用紙に書写して綴った稿本で、上下二冊からなり、冒頭に「昭和廿五年八月廿七日装之 柳田泉」とある（岡保生「解題」前記『紅葉全集』第十二巻）ものである。

ほかに、十一日後に発信のお定宛の書簡（明治三十六年七月二十八日付）も同様であるが、宛名の「おさだ」「お夏」については、右「解題」に「紅葉書翰」に「おさだ 仲ノ町大黒屋女将／お夏 同伊勢屋女将」という注記がある」と記されている。

同時代では、「十千万堂日録」の記載が途絶えたのちの様子を記録した山里水葉「十千万堂日誌」（翻刻は木谷喜美枝『尾崎紅葉の研究』双文社出版、平成七年一月十八日）の明治三十六年九月九日の見舞客の条に「夏、定、（金色芸者）」との記載がある。翻刻の注は両名を「不詳。芸者の名か」とし、「金色芸者」を「金春芸者の誤記か」

とするが、「女将」（柳田注）になる前の彼女たちは「金色夜叉」を愛し、紅葉に馴染の芸妓として知られていたので、水葉の「日誌」の記述は決して誤記ではない。本簡が他の書簡に比してひらがなの多いのは、芸妓であった兩人への心遣いにはかならないのである。

右の見舞から十日後の「二六新報」（同年九月十九日付・二面）の「げいしやしやくわい」に、

小夏お茶羅の時代已に過ぎて今日の芳原如何の状ぞだ、お貞、お夏、太郎等僅に残墨を維持するも、襲ひ来る不景気の敵軍に五十軒の石畳防ぐに由なく、見返り柳人影絶え、大門に白旗齧るも遠き将来でなからうさ、

とあり、明治三十七年刊『東京明覧』（織田純一郎他編、集英堂、同年三月三十一日）

の「新吉原仲之町芸妓」の項に（記載は、芸名・住所及電話・生年月・氏名、の順）、

▲なつ 江戸町一ノ一三 慶応三年三月 小野なつ（…）

▲さだ 同一ノ一七 明治二年九月 清水さだ

と出ていて、生年本名が判明する。記載仲之町芸妓九十二名のうち、最年長は安政五年生れの元治（佐藤もと、四十七歳）、最年少は明治二十五年生れの鶴（加藤たま、十三歳）である。なつは紅葉と同じ歳の二十八歳で上から九番目、さだは三十六歳で十番目となる。先の「二六新報」記事に名の出た太郎（林りせ）は明治三年三月生れの三十五歳で、なつの隣に名がある。

また『東京案内』（読売新聞社、明治三十九年五月二十八日）の「吉原の芸者」の「重なる者」を挙げた二十名のうちにも「なつ」「さだ」の名があるほど、当時仲之町芸妓の名代といってもよい兩人であった。

すでに「年譜」には記載すみだが、その後の「東京朝日新聞」（明治四十二年十一月三日付・十二面）の「お夏の紅葉祭」には、

吉原の廓に左るものありと知られた老妓お夏は予て故紅葉山人の作物を愛読

し山人此の世を去れりと聞きて巻を抱いて泣きたる女なるが一昨々日は自宅に於いて紅葉山人七回忌追福の為紅葉祭を行ひ泉鏡花其他の文士連廿余名、仲の町の同業お定外十余名を招き祭式の後余興として「金色夜叉」の劇其他故人に因める珍趣向を催したる由

と報じられている。本会に先立つ三回忌の追善は、鏡花の「仲の町にて紅葉会之事」（新小説 明治三十八年十二月）にも記されているが、この時鏡花とともに招待を受けた登張竹風は、後年の座談会（「物故文人を偲ぶ座談会」「文芸春秋」十二年十号、昭和九年十月一日）で、その経緯について語るところがあった。やや長いが、次に引用してみる。

東京座で金色夜叉が演ぜられて居ります時に、俳優は高田実、藤浅「澤」浅次郎と云ふ連中で……、其時に吉原の老妓お夏、お定と云ふのが、毎日芝居を見に来て居りました。所が段々芝居を見て居る中に、此二人が紅葉先生に会ひたいと言ひ出して、誰か紹介して呉れる人はなからうかと云ふので、其毎日東京座で二人を呼んでる人を私が知つて居りましたから、私に頼んだらと云ふので、私から鏡花君に頼んで、さうして紅葉先生にそれを通じました。紅葉先生は其時病気が重い時だが、会ふと云ふので、それで二人が会ひに行つたんです。

所が会ひに行つて見ると云ふと、お定と云ふ人は、若い時に紅葉が吉原で遊んで居る時分に岡惚れしてゐたんださうです。やあお前かと云ふやうなことで、大変御気分がよかつた。暫く御話を承つて、短冊を書いて貰つて、写真を頂戴して帰つた。で帰ると後で、何か二人で先生に送つたと云ふので、紅葉先生は大変喜んださうです。それから手紙を例の麗筆で、幅の狭い巻紙へ礼状を書いて二人へ送つて居ると云ふやうな関係から、紅葉先生が亡くなられてから、二人は其命日には必ず青山に参詣をする。時には奥さんと一緒

に参詣をしてゐたんです。其翌年の霜月に法事をするに云ふことがありまして、吉原で法事をするに云ふので、私と泉鏡花と藤澤浅次郎が其法事によばれました。（…）今日は鏡花君は居りませんから、今其大要を御話する訳であります。（原文の傍点を省略）

右の竹風の言に従えば、東京座の「金色夜叉」上演（明治三十六年六月十四日初日）を機として、両妓の紅葉への面識を斡旋したのが竹風と鏡花であり、紅葉歿後お夏の催した追善会に「金色夜叉」で間貫一を演じた藤澤浅次郎とともに、竹風、鏡花の招待されたのには、しかるべき由縁があつたわけである。

当然ながら両名は鏡花の書簡にもあらわれており、明治三十六年十二月十一日付、会津の後藤宙外宛には「十六日には雪中御出馬のよし（…）実に先生に対し御厚意のだん一同感泣仕り候（…）当日は随分大勢のことゝ存じ候 なかにもよし原なつさだといふのが、いづれも名の下へ子の字づきにて白山の英雄戸張君がさい領し馳せ参ぶるつもりに内談これあり候」とあつて、文面から察するに、十二月十六日紅葉館で催された「紅葉山人追悼会」のため上京する宙外への謝辞である。三十五年三月に知遇を得て以来の登張竹風との親交の深まりに、お夏お定両妓の絡んでいたことが判明する。二人の老妓の紅葉追善は、三回忌、七回忌のみならず、もとより紅葉歿の直後から始まつていたのである。

紅葉の逝去（明治三十六年十月三十日）は、十二月十六日の誕生日と近かつたので、翌年からの日に際し「紅葉祭」が始められ、断続して大正期に至るが、回忌の節目には遺族諸氏の所蔵する遺品の展覧会が開かれた。

「年譜」に記載すみだが、十三回忌の大正四年十二月五日より八日までの四日間、三越呉服店（旧館竹の間）における「遺品展覧会」の「出品目録」（「三越」六巻一号、大正五年一月一日）には「よし原おなつ女史」の「病中尺牘」「色紙（賀の句）」「短冊」「写真」の四点が、「よし原おさだ女史」の「病中尺牘」一点がそれぞれ記載され

ている。

昭和に入って、四年十一月三十日より十二月六日まで、東京三越ギャラリーの「紅葉山人二十七年忌記念展覧会」（同「会誌」東京三越、刊記なし）においては、「小野なつ子殿」として「見舞に対する礼状 卅六年七月 一通」「佐渡糸女のために揮毫したる三味線皮の写真 一枚」、「清水さだ子殿」として「病中の手紙 卅六年七月 一通」が登載されている。先述した柳田泉の稿本、すなわち「紅葉書翰」に収めるところの二通は、この時の出品を筆写したものであった。

また、青山墓地の紅葉の墓所には、墓石の傍らに手水鉢が据えられているが、いつ供えられたのか不明ながら、その正面のみみじの彫模様の脇には「小野なつ」の署名が刻まれてある。

以上をもって、おなつ、おさだの両名が紅葉歿後の追福を欠かさなかったことは銘記されてよいと思う。

なお、鏡花の通夜（昭和十四年九月十日）に際しては、小野なつ子が弔問している（「年譜」記載）。同じく情誼の篤さを窺いうる一事であるとともに、彼女のこの時（七十三歳）までの存命が確められるのである。

紅葉書簡文中の「太田氏」は、紅葉門下の藻社にも加わっていた画家で俳人の大田（太田）南岳のことではないかと思われる。『大正過去帳』（東京美術、昭和四十八年五月十五日）には、

俳人。大正六年七月一三日千葉県市川で水泳中逝去。大田蜀山人の裔。本名享。

明治六年東京生まれ。杏花園とも号し、俳諧・絵画・篆刻・釣魚・大弓・義太夫などいづれも堂に入っていた。青年時代下条桂谷に画技を修め、尾崎紅

葉と親しみ星野麦人と親交があった。一生、奇行逸話の連環であった。胃を病み、千葉市川に居を移していた。東京市小石川原町本念寺の蜀山人の墓の隣に埋葬されている。

とある。明治末年の肖像は「文章世界」（七巻二号、明治四十五年一月一日）のグラフィック「巖谷小波氏を中心とせる木曜会の人々」の集合写真の中に見ることができる。

「年譜」には記載済みだが、明治三十五年三月十六日の藻社の遠足会（川崎小向の梅見）に同行、紅葉歿後、四十年九月十日発行の「俳藪」に「紅葉句帳に漏れたる句」を紹介しているほか、明治三十八年六月「ハガキ文学」（二巻九号、十五日発行）には「泉鏡花氏と対話す」を寄せている（須田千里「資料紹介」「泉鏡花研究会会報」二十八号、平成二十四年十二月二十日）。この対話の打ちとけた話しぶりは、両者が明治六年生れの同い歳だったことによる親しさゆえであろう。

事故の報（太田南岳氏溺死す）「東京朝日新聞」大正六年七月十五日付・五面）は、

野口幽谷門下にて太田蜀山人の後裔に当る画家南岳太田享氏（四五）は十三日午後二時半頃市川町大字大洲にて次女小（八七）と遊泳中小が深味に陥りたるを救はんとして過つて水中に没し其儘行方不明となるが附添ひ居たる出入の百姓新は大に驚き直に斯くと市川警察署に急報し署よりは船を出して死体捜索を行ひたるも十四日午後五時までは発見せられざりき

と伝えられ、その後遺体は十八日に浦安沖の海上で見つかり、二十四日に小石川区原町四十の本念寺での葬儀が報じられた（「南岳氏の葬儀」「読売新聞 大正七年七月二十二日付・五面）が、この葬儀への鏡花の参列は確認できない。

なお、典拠紅葉書簡中の「金子」は、前記『東京明覧』第二十二章貸席貸座敷の部に、住所が浅草区千束町二ノ六一、主人が金子わか、と出ている待合である。「さ、のじ」は誰であるのか、巖谷小波かとも思われるが、特定できない。

明治三十九年（一九〇六） 丙午 三十四歳

一月 八日、日高有倫堂より『誓の巻』を刊行した。刊行後、署名して尾崎紅葉未亡人喜久（子）に贈った。

【典拠】川島幸希「統署名本の世界21『誓之巻』『通夜物語』『菖蒲貝』 献呈署名本」

〔日本古書通信〕七十卷三号、平成十七年三月十五日〕

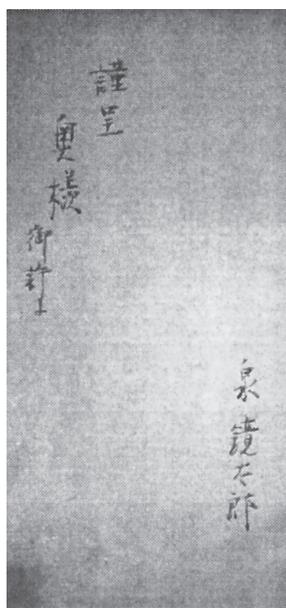
「 泉鏡太郎

謹呈

奥様

御許に

見返しに墨筆で丁寧に署名されたこの『誓之巻』（明治三十九年九月・日高有倫堂）の受贈者の名を詳らかにする痕跡は何もないから、献呈先を確定するのはまず不可能である。しかし泉鏡花が大いなる敬意を払って自著を献じる「奥様」（よもや奥という人物ではあるまい）の候補者は極めて限定される。そして鏡花に関心がある人の誰もがすぐに思い当たるであろう「奥様」はただ一人。鏡花が終生崇めた師、尾崎紅葉の未亡人である。名前を喜久という。



【注記】

尾崎喜久（子）は、明治六年九月四日、芝浜松町の医師樺島玄周、はなの長女として生れ、昭和二十八年一月二十一日、享年八十一で歿した。出生は鏡花より二か月早い、同じ歳であった。

訃報（『朝日新聞』昭和二十八年一月二十三付・夕刊三画）には、

尾崎喜久子さん（尾崎紅葉未亡人）二十一日老衰のため東京都大田区田園調

布二ノ二三ノ一の自宅で死去、八十歳。葬儀は二十四日午後二時から東京都港区赤坂一ツ木町円通寺で行う。明治三十六年紅葉が「金色夜叉」執筆中死んでから四人の遺児を育てて恵まれない生活を送っていたが、今年の紅葉五十年祭を機会に文壇関係からの救援が始められていた。

とあるが、「読売新聞」（同日付・夕刊三画）には、死因が肺気腫とされている。

明治二十四年三月二十一日、十九歳で尾崎徳太郎に嫁し、長男弓之助（明治二十六年一月十日生、同十五日歿）、長女藤枝（二十七年二月三日生）、次女弥生子（二十九年三月十日生）、三女三千代（三十三年三月二十六日生）、次男夏彦（三十四年五月二十日生）の二男二女をもうけた。

鏡花の「初めて紅葉先生に見えし時」（明治四十三年二月）に「しばらくして、鄰の茶の室の襖を半ば、半身を差し出されし美しき御方あり、後に知りぬ、令閨よ。」と記される彼女の新婚当初の印象は、鏡花が明治二十四年十月に入門するよりも早く、横寺町を訪ねた田山花袋によって鮮明に語られている。

○廿四年に私は初めて、紅葉先生を横寺町の彼の家へ尋ねて行つたのです。（…）今でも覚えてゐる、丁度七日の事で、岡田三面子が大学の卒業試験が済んだばかりの所だと云ふので来てゐた。（…）其頃尾崎さんの所へは新夫人が、来たばかりの所で、家へは入ると、白い筆筒などが目に付くし、鏡台などが並んでゐるし、何処となく艶しい、くすぐられるやうな気がして、室へ通ると、紅葉と菊の花の付いた新しい座布団をとつて来同じ模様の付いた茶道具を出して来る。其時三面子が初めてだと見えて、先生に、「令夫人を見たよと、」小声で言ふと、「どうだ、別品だらう」と笑つてゐられた。（我は如何にして小説家となりしか 三）『新古文林』三卷一号、明治四十年一月一日）

花袋はまた『東京の三十年』（博文館、大正六年六月十五日）の「紅葉山人を訪ふ」の章でも重ねて「若い美しい花のやうな菊子夫人」の様子を語っているほど、彼

女の姿がめざましかったのである。

『誓之巻』刊行から半年後の「文章世界」（二巻四号、明治三十九年六月十五日）には、「故紅葉山人の遺族」と題した喜久の写真が載っている。紅葉の歿後、喜久は作家の未亡人の典型として、おりおりの紙誌に取り上げられ、夫を喪ってからの生活を語っているが、歿後七年目の談話「種々のお話」（『新小説』十五年九巻、明治四十三年九月一日）では、弟子のことに及んで、

小栗は国の方へ引込んで仕舞しましたが、泉と柳川は東京に居りますので時々は訪ねて来て呉れます、然し此方は女ばかりでございますから、折角おいでになりましたも、何にもお話がございませんので、奥様の方が代りによくお見えになります、泉は私の所に一番永く居りましたので気心も一番よく知れて居りますが、洵に義理堅い男でございます、彼の人の書きます物は昔から彼様いふやうに一風変つて居りましたが、今では全く、独舞台でございますね。

と述べている。この年、鏡花は一月の同誌に「歌行燈」を発表、前年逗子滞在を引揚げて帰京した土手三番町から、五月に下六番町へ移っていた。

さらに後年、昭和十二年当時の新聞記事（『その後の消息 遺児を護つて／傷心の喜久子未亡人／紅葉山人の遺族を訪ねる』『東京朝日新聞』同年二月二十日付・夕刊三面）によれば、六十五歳のこの時、目黒区宮前町一ノ六七一の家に住むまで、紅葉の歿後横寺町を引払い、芝新堀町の実家（樺島直二郎方）、震災後は杉並区天沼に移り、長男夏彦の病氣療養のため平塚に四年居た、と語り、末尾は「こんな郊外に来てしまつて今では泉鏡花さんがたづねて下さる位のもです……」との言葉で終っている。

勝本清一郎は、昭和九、十年ごろ、尾崎家窮乏のおり、紅葉の遺品を鏡花に買取取つてもらいたいと頭を下げたが、これを断られ、「温厚な未亡人が「泉が……泉

が……」といって、悲憤の口調で話したことを私は今でも思い出す。」（『鏡花の異神像』『国文学解釈と鑑賞』十四巻五号、昭和二十四年五月一日）と記している。先の新聞記事の二、三年前の出来事であるが、遺品の買取りを謝絶した鏡花と、郊外の住居に未亡人を見舞う鏡花との間には相当の懸隔がある。

最晩年の写真としては「文芸往来」（三巻三号、昭和二十四年三月一日）のグラビア頁に、遺愛の煙草入を持つ姿が掲げられている。

明治四十二年（一九〇九） 己酉 三十七歳

一月二十八日付「読売新聞」（五面）の「文壇はなしだね」に、清元の稽古のことが報じられた。

【典拠】「文壇はなしだね」（『読売新聞』明治四十二年一月二十八日付・五面）

△泉鏡花氏は此頃になつて、妻君の三味で清元の稽古をやつて居る相な、十八番は北洲だと聞いて居る。

【注記】

「北洲」は「北洲千歳壽」の通称。「日本名著全集」の『歌謡音曲集』（同刊行会、昭和四年十一月二十日）の解説には、

清元名曲の一。北州は江戸の中心から北方に当る新吉原を指した言葉で、「北里」「北」などと同じである。この吉原の年中行事を素材として、その里の繁昌長久を祝つた作で、太田蜀山の作であると称へられ、作曲者は川口のお直であるといふ。お直はもと吉原の芸者で、後に橋場へ料理店を出して川口といひ頗る繁昌した。清元、河東に堪能で、三絃も上手であつたといふ。

とある。

鏡花と音曲との関係では、これまでのところ久保田淳氏「泉鏡花とうた・うたひ・音曲」（『日本歌謡研究』三十九号、平成十一年十二月三十日。のち『鏡花水月抄』翰林書房、

平成二十八年七月二十一日、に収める）が最も総合的な視点を提示しており、「清元」について、

近世の音曲では、清元を使うことが比較的多いであろうか。『舞の袖』での「保名」（深山桜及兼樹振）、『蝶々の目』での「十六夜」（梅柳中宵月）、『湯島の境内』での「三千歳」（忍逢春雪解）などがそれらの例であるが、中でも『浮舟』での「喜撰」（六歌仙容彩）の用い方は巧みである。との指摘がある。

これを鏡花周辺の人々の言葉に就けば、長谷川時雨『明治美人伝（三十）』泉 子（下）（『読売新聞』大正二年八月十日付・五面）の末尾に、

廓^{なま}で仕込まれただけあつて花柳派の踊りを、自分でもゆるしてゐるほどである。いつぞやの病氣全快祝に、築地の花屋^やの二階で「保名」を踊つて見せたことがある。つれて兄さんも一つ二つは踊れる。我ものと思へばかるし傘の雪、がおはこであるとか。

とあり、「病氣全快祝」は「補訂（十七）」に述べた明治四十一年十二月（二十六日カ）の築地花廻家における会のことだと思われるが、すずの「保名」の踊りとともに、「兄さん」＝鏡花の「我もの」（通称「流星」。「夜這星」トモ。本名題「日月星昼夜織分」）を「おはこ」とする。

また久保田万太郎は「もみちの賀」（『図書』五十号、昭和十五年三月五日）の「唄」の章で、

先生、お酔ひになり、御機嫌になつて、しば／＼唄をおうたひになつた。

あるひは「お江戸日本橋七つ立ち……」を。

あるひは長唄「月もくらま……」を。

あるひは清元「冴返る……」もしくは「いきなお方に釣合はぬ……」を。

このうち「三千歳」の、『婦系図』の湯島の境内の場につかはれてゐることは

あまりに有名である。が、「お江戸日本橋」の、『日本橋』の序まく茅の家の場につかはれ、「夕立」の、『湯島詣』の歌枕の場につかはれてゐることを知るものはすくない。

なほ『稽古扇』の紋次の出にうたふ「恋ゆるゑに、魂ぬけてとぼ／＼と、来てみりや小春の人でなし」といふさのさぶしは、「わがもの」とともに、先生いよく御機嫌になり来つたときの演伎曲目の一つである。

と回想している。「冴返る」は「三千歳」、「いきなお方に」は「夕立（貸浴衣汗雪）」であり、「わがもの」が先引「明治美人伝」と一致することから、これを鏡花の「おはこ」であつたとしてよいであろうか。

いずれにしろ、如上両人の言明の示すところ、「清元」をその代表とする江戸音曲が、作品のみならず作者の日常にも及んでいたことは疑いなく、鏡花世界の重要な側面である「うた」の問題は、今後久保田氏の指摘をふまえて、さらなる考究説明を要する。

明治四十三年（一九一〇） 庚戌 三十八歳

三月 二十三日付「読売新聞」（五面）の「はなしだね」に「泉・鏡・花・君は駒下駄よりも雪駄が好きで、雨の降る時には車の上で履いてゐる」と報じられ、二十六日付同紙面「はなしだね」には「泉・鏡・花・君と柳川・春・葉・君とが会ふと何時も話の終りが子供の事に落ちるさうだ何方^{どっち}もまだ子供がない」と報じられた。

【典拠1】「はなしだね」（『読売新聞』明治四十三年三月二十三日付・五面）*引用を省く。

【典拠2】「はなしだね」（『読売新聞』明治四十三年三月二十六日付・五面）*引用を省く。

【注記】

鏡花より四歳年下の柳川春葉は、友人村山鳥逕が広津柳浪の親戚（従姉がその夫人）

であった縁から柳浪を訪ねて断られ、のち鳥遯の叔父の加藤医師が尾崎紅葉の友人であったことから伝手を得て入門を許され、鏡花が父清次の計によって帰郷中の明治二十七年の五月、十八歳で玄関番となった。

紅葉門では鏡花と一番気の合った相弟子であり、紅葉歿後の三十七年六月二日に結婚した。夫人の薩子は紅葉かかりつけの木澤病院の看護婦であった。結婚した際には「よみうり抄」(読売新聞)明治三十七年六月十日付(一面)に、

△柳川春葉氏は数日前泉鏡花氏の媒妁にて結婚せりと
と報じられたほどである。

春葉夫妻は長らく子供に恵まれなかったが、大正四年九月三十日、結婚後十四年目で長女千枝子が生れた。大正七年一月九日に春葉が歿した時、薩子夫人は長男数彌(春葉の祖父と同名)を身籠っていた。

鏡花に子供は無く、歿後四年目の昭和十八年に、すず未亡人が実弟豊春(斜打)の長女名月(当時十一歳)を養女とした。

明治四十五年・大正元年(一九二二) 壬子 四十歳

七月 二十二日、福岡の久保より江は、四国旅行中の長塚節(高松在)宛に博多寿座「婦系図」観劇の感想を書き送った。

大正二年(一九一三) 癸丑 四十一歳

七月 十六日、前日夕刻に上京した久保より江は、逗留先の番町の鏡花宅を差出しに長塚節(茨城県結城郡岡田村在)宛の葉書を出し、以後、二十五日(封書)、二十六日(葉書)、八月三日(葉書)にも、同じく長塚節宛に書信を送った。

【典拠1】久保より江の長塚節宛書簡・明治四十五年七月二十二日付(春陽堂書店

版『長塚節全集』別巻、昭和五十三年六月二十五日)* (一)内は原文。以下同じ。

642(七月廿二日 香川県高松市事務官 堤様かた 長塚 節様 久保より江 福岡市外東公園より)

ところ／＼よりの御たより皆々うれしがって拝見いたしてをります 御出立のあと二週間ほんとの梅雨らしい御天気で実にいやでした もうすこし御出立を御見合せなすつた方がよござんしたのにと毎日／＼申あつてをりました(…)おたがひ様からだを大事にしてまた御めにかゝりませうね この頃博多はお芝居で大きはぎです 左団治(マモ)が博多坐(マモ)に(公園の)喜多村が寿坐(マモ)に参つてをります 昨日主人と妹と三人で寿坐へ参りました あつくつて／＼冬支度の役者が汗をふいてばかりゐるのが気のどくのやうでした 芸題は鏡花の婦系図でしたがその主人公の早瀬主税といふのになつたのがあなたにそっくりなんです たゞ色を白くぬつてゐました 私がはじめにオヤ長塚さんに似てゐますねと申しましたら 主人もウム似てゐる妹もほんとうにと申しました 誠に失礼 役者なんかに似たなんて御めん下さいまし(…)こんどはどこへ手紙をさし上げませうか たいへんどうもながい手紙になつて失礼です私にはあんなに細かく書けないんですもの 主人より妹よりもよろしく

久保より江

長塚節様

七月廿二日

きいちやんから「この次に手紙をあげますとおつしやつて下さい」と

【典拠2】同右・大正二年七月十六日付(同右)

716(七月十六日朝 茨城県結城郡岡田村 長塚 節様 久保より江 東京、麴町、下六番町十一泉様かたより(はがき))

主人は十四日の夕七時にぶじにつるがを立ちました、あなたによろしくと申しました、見送りをすませて昨十五日夕私は都の人となりました、とても都の

風はあてられまいとあきらめてゐた、あの扇もさつそくいの一番に使はれ
ました、御ひまがあつたら御遊びにいらつしやいまし

【典拠3】 同右・大正二年七月二十五日付(同右)

721 (七月廿五日 茨城県結城郡岡田村 長塚 節様 久保より江 東京、麴町、
下六、十一 泉氏かたより)

ずるぶん東京は御暑うございます、御国は如何ですか、御忙しうございますか。
主人を見送つてから東京へ参りましてもう十日になりますが、暑くてく外
出も何もできません、岡田さんと小此木さんとへお義理に一寸顔を出したば
かり、毎日くぐぐくと暮してをります、さうく夏目先生へ先日夕方に
一寸伺ひました、思つたよりは御丈夫なので安心いたしました、あなたのお
話ができましたよ、まじめな、今の世には珍しいかたぐとおつしやつていらつ
しやいました、(…)今はほんとに暑うてく御上京をおすゝめするわけには
参りません。御結婚の御話はどうなりました、きいちやんはあなたが出雲へ
いつて下すつたおかげとみ江で、漸くきまりました。お医者さんです。改め
て御礼を申し上げます。

先はいろくとりませて さよなら

七月廿五日

より江

長塚 節様

私は八月の半までゐたいと思ひます。

【典拠4】 同右・大正二年七月二十六日付(同右)

722 (七月廿五日 茨城県結城郡岡田村 長塚 節様 久保より江 東京、麴町、
下六、十一 泉氏かたより(はがき))

御手紙ゆきちがひになりました、ずるぶん暑い事ですね、馬鈴薯の花けさた
しかに。ゆつくりと委しく拝見いたしたいと存じます。御二かた様にもよろ

しく御序に御礼をおつしやつて下さい べに奉書はどうしませうか

七月廿六日

【典拠5】 同右・大正二年八月三日付(同右)

725 (八月三日夕 下谷区上車坂町十四那須館 長塚 節様 久保より江 麴町下六、
十一、泉氏かたより(はがき))

いろくく御疲れだったでせう、明日御待ち申しております、電車は外堀なら
市ヶ谷 九段新宿行なら麴町八丁めで下りてすこしあと戻りして塩瀬の横町
を左へまがつて、左側のポストをめあてにいらつしやい、その四角の煙草屋
のすぐ隣、表札はよく分りませんが、表に杉がうゑてあります

八月三日夕

【典拠6】 「喜多村劇」婦系図」(福岡日日新聞)明治四十五年七月二十日付・七面)

* 活字の大きさは均等とした。

博多寿座に於て初日來好人気を博せる喜多村緑郎一座本日よりの替替^{かはりげだい}は喜
多村得意の「婦系図」にて重なる役割左の如し

早瀬主税(藤野秀夫) 文学士河野英吉(佐久間熊男) 肴やめ組の宗助(雪岡
光次郎) 宮畑耕作(御門敬助) 小僧万吉(深津三郎) 英吉妹すが子(桜井
武夫) 坂田礼之丞(河本重徳) 英吉母富子(嵐猪三郎) 芸妓小芳(酒井信
一) 酒井妙子(島田北子) 易者(藤村秀郎) 声色屋由松、芸妓春駒(林
緑水) 魚十女中お金(安部芳郎) 神士前橋(伊達良三) 按摩與一(秋田梵風)
酒井俊三(後藤良介) 芸妓お蔭(喜多村緑郎)

【注記】

典拠とした久保より江の長塚節宛書簡については、真田幸治氏の講演資料「泉
鏡花と小村雪岱の出会いの年―その媒介者、久保より江」(第六十五回泉鏡花研究会、
於昭和女子大学、平成二十八年七月十六日)により教えられた。

長塚節と久保より江との交流は、夫君久保猪之吉博士から喉頭結核の治療を受けるため、夏目漱石の紹介状を携えて九州帝国大学の医科を訪ねた明治四十五年四月を機とし、その三年後大正四年二月八日、同じ大学の附属病院で長逝するまで続くのである。より江は自分のところへ届いた節の葉書が優に百枚を越えていた〔長塚さん〕「アララギ」八巻六号〔長塚節追悼号〕大正四年六月一日。のち『嫁ぬすみ』政教社、大正十四年八月十日、に収める〕と述べているが、『長塚節全集』に収録の書簡は全部で八十四通、より江の節宛は三十七通を数える。最初の診察を終えた四月二十五日以降、熊本、鹿児島、長崎、佐賀を経て福岡に戻り、五月二十五日東公園の一方亭に招かれてより江と対面した節の、筑後船小屋から六月一日付で出した葉書が現存最初の書簡、対するより江の節宛の初めが典拠1となる。七月十九日に別府を経て四国高浜に渡り、より江の生地松山道後温泉に遊んで正岡子規の旧跡をたずねたのち、高松の堤定次郎（当時香川県内務部長）の世話になっていた節であった。

典拠1でより江が話題にした喜多村緑郎の博多興行は、七月十七日より十一日間の後藤良介との合同一座で、一番目「不如帰」二番目「心中天網島」三番目喜劇「角兵衛獅子」をお目見得とし、二十日から二の替りで「婦系図」となった。典拠6の通り、早瀬主税役は藤野秀夫（明治十一年五月十六日生、昭和三十一年二月十一日歿。山口定雄一座で初舞台、のち喜多村緑郎の門下となり、明治四十三年東京座『俠艶録』の瀬尾富士雄で幹部昇進。当時三十五歳）で、立役二枚目を得意とした藤野の面立ちは、たしかに長塚節によく似ている。劇評（竹田秋樓「寿座の『婦系図』」『福岡日日新聞』明治四十五年七月二十二日付・七面）では「明治根性の早瀬主税も、独逸文学者とは名のみで馬鹿に女に頭が低い処、其処に亦鏡花国あり」、「一般に『婦系図』は舞台がイライラせず、俳優はセキ込まず、何気なく余裕を示して遣つて除ける処が『不如帰』より感じが良い」とされている。

寿座は二十三日から三の替りで「俠艶録」を出し、二十六日四の替りで「盡きぬ恨」を出して二十七日に千秋楽となった。十日間の興行を一日ないし三日ごと、四の替りまで出すのは目まぐるしいが、これが一座得意の演目を次々に繰出す当時の地方巡業の常態である。

一方、博多座の左団次一座（市十郎、又五郎、松蔭、左升、寿美蔵ら）は、久留米興行をおえて博多に乗込み、十四日町廻り、一番目「夜討曾我」中「双蝶々曲輪日記」二番目「丸橋忠彌」で十五日の初日を明け、こちらも三の替りまでを出し、二十四日に千秋楽で、二十七日からの小倉常盤座興行へ赴いた。

博多を上げた喜多村は「今回を以て後藤一座と分離し京都国技館にて新派合同の『不如帰』を演ずる由」（『福岡日日新聞』明治四十五年七月二十七日付・七面）と伝えられたが、七月三十日の明治天皇崩御による歌舞音曲停止で八月の興行は流れて、翌九月二十日から大阪中座の鏡花原作「稽古扇」再演（初演は同年二月東京明治座）の舞台に立った。

すでに「年譜「補訂」四」に記した通り、喜多村は翌々年大正三年の八月にも博多寿座で同じく後藤良介と一座して「瀧の白糸」（二の替り十九日初日）、「婦系図」（三の替り二十二日初日）を上演しており、夏芝居を九州巡業に充てるのが恒例となっていたごとくである。

典拠1文末の「きいちやん」は、文中の「妹」に同じ、夫猪之吉の異母妹キク（菊子・喜久子トモ）のことである。大正四年五月、猪之吉の教室に入った耳鼻科医高崎啄男と結婚したが、節はキクにも多くの書信を送っている。

久保より江と鏡花とのことは、今回「本文の訂正・追加」の大正元年十月二十二日の項にも触れたが、本項の典拠2―5からは、より江が単身上京した際、番町の鏡花宅を逗留先としていたことが判明、両者の交際の親密を窺うに足る資料である。

これとは別に、「年譜」大正五年八月十六日の項に、久保より江の泉すず宛書簡のことを記したが、その典拠を以下に引用してみる。

洗ひはりたしかに、御手紙もたしかに。

土用があげて却ておあつくなりしました、でも千代の松原の夜は、すこし分けてあげたい位風があります。うちのなかはまるであなぐらのやうでたまりません。

主人（猪之吉博士のこと）は明十七日帰宅の筈、又おみやげ話がはづむ事と存じます。金沢に十一、十二、十三、十四日とをりました。和倉（温泉）へも一寸参つたさうです。

洗ひはりは、私にもよくは分りませんが、ちよつとしるしをつけてみました。こんど出来て来たのはまだかんじ、ようにはいらぬやうですね。紹の袖とかい、きのうらとははいつてゐますけれど。どうも勘定書の字がよめないで困ります。しるしの外にもつと私どもがあるのかもしれない「ま」せんよ。

先日いただいたゆかた、大変意気ないゝのになりました、明日からきぞめをいたします。弟（護躬博士のこと）はらんぼうでゐてどこかやさしい所もあるんですよ、およめさんはきつとかあいがりますよ、主人よりか叱らないかもしれません、気がながいやうですから。

二人一しよにおくと何から何まで反たいでおもしろいんですよ、第一からだがソマトーゼの広告のやうでせう、気がながいのと短いのでせう、声が高いのと低いのでせう。それでも大変なかはよささうです。

蝶々の箱三十になりました。殿様道らくには会計がかりが大めいわくです。けふはこれでおしまひ、《鏡花》先生の御作が新小説に出るのですか。

八月十六日（大正五年）

おすゞ様

より江

〔明治女流名家書簡選集〕「婦人倶楽部」七巻十号附録、大正十五年十月一日。括弧内の補記、傍点は原文のまま）

洗張りの到着や浴衣の贈答、弟夫婦の様子、夫猪之吉の蒐集、鏡花新作（新小説）十一月号掲載の「秋薄内証話」カ）のことなど、日常のさまざまに互つて、今のところ鏡花周辺の人物でこのようならず夫人との交際が如実に認められた書簡は他に見出したい。

小村雪岱は「初めて鏡花先生に御目にかゝつた時」（「函書」五十号、昭和十五年三月五日）において、久保夫妻が逗留する神田駿河台の旅宿へ「日本で初めて鼻茸の手術をした医者の肖像、豊国の筆になるのを」模写に通つていたおり、鏡花と出会う前日に、

御宿へ伺つて模写をして居ますと宿の女中が夫人に、泉さんの奥さんが御見えになりましたが御通し申上げませうか、と伺ひました時、その後で通つてゐますよと言はれましたのが、思もかけぬ泉先生の奥さんでありました。

と回顧している。鏡花雪岱の出会いの年が明治四十二年であるとすれば、このころにはより江との間柄が、せずをして「通つてゐますよ」と言わしめるほど入懇になつていたことになる。

主人の鏡花はもとより、身の周りの世話をするはず夫人のよほど心を恕すところが無ければ自宅への逗留は難しく、典拠2-5の発信された二十日間（もしくはそれ以上）におよぶ番町滞在は、より江とせずとの親昵を証して余りあるものといえよう。

大正四年（一九一五）乙卯 四十三歳

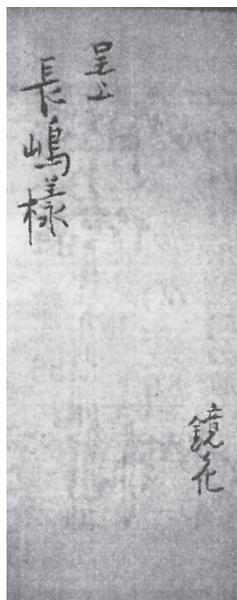
五月 二十日、植竹書院より「現代代表作叢書」第八編として『菅浦貝』を刊行した。刊行後、署名してこれを長島隆二に贈った。

【典拠】川島幸希「統署名本の世界21『誓之巻』『通夜物語』『菖蒲貝』献呈署名本」

〔日本古書通信〕七十巻三号、平成十七年三月十五日〕

鏡花本は見返しに木版画の入っているものが多いこともあって、署名が扉や扉対向ページにされている本が多数派を占める。さらには、そこに書くのに鏡花が慣れたからなのか知らないが、見返しに木版画がなくても扉付近に署名がなされている例もある。

つい先日古書市場に出てきた『菖蒲貝』（大正四年・植竹書院、見返しは色紙だが絵はない）の献呈署名本もまさにそのケースで、署名は扉対向ページにあった。この本は袖珍本一括の中に紛れ出品の封筒にもその旨の記載がなかったそうだが、最終台に出ているから発見するチャンスはどの業者にもあったはずである。にもかかわらず気がついた人が少なかった（らしい）のは、せいぜい見返しまでしかチェックしなかったからだろう。もっともそれ以上求めるのは酷な話でもある。



【注記】

典拠文では献呈先の「長嶋様」について言及がないが、「年譜」大正三年七月二十日の項に記した長嶋隆二だと考えられるので立項した。

長嶋隆二については、「年譜」大正三年七月二十日の項のほかに、これまでも再

三言及してきた（一）「解説」岩波書店版『新編泉鏡花集』第五巻、平成十六年三月二十四日。

（二）本「補訂（十一）」。（三）「泉鏡花と演劇」『泉鏡花素描』和泉書院、平成二十八年七月二十

五日）ので、重複は避けたいが、「年譜」の典拠とした長島の「泉鏡花君」（『政界秘話』平凡社、昭和三年十月二十五日）の一節だけは引いておきたい。

多分大正三年の夏だと記憶するが、私は箱根宮の下の奈良屋に逗留してゐた事があつた。その時私は小さな二人の娘と女中とを連れて其処の洋館に一夏を過したのである。（…）

此頃の或日突然一人の来訪の客があつた。その来客は実に思ひ掛けなくも泉鏡花君であつた。

が、私には鏡花君がどうして未知の私をわざ／＼東京から訪ねて来て呉れたか不思議でならなかつた。（…）

実は私の末弟は、紅葉先生の門下であつて、永く牛込横寺町の先生の御宅に寄寓してゐた事があつた。（…）

鏡花君は、その紅葉先生の門人である。従つて私の末弟とも頗る近い関係にあつた。

私はそんな事を想ひ出したので、鏡花君がきつと遊びに来て呉れたものであらうと思つて快く会つて見た。（…）鏡花君の用事といふのは、私が劇界を統一する会社を作つて其社長になると云ふ新聞記事を見たので、その会社に関係を持ち劇作に当たりたいと云ふ希望から出たものであつた。

然乍らその新聞記事は間違ひであつた。尤もその当時大谷（松竹）故田村（市村座）故新免（有楽座）の三氏が度々私の処へやつて来、これから劇界を大統一して新会社を作らうと思ふから其社長に適当な人を見付けて呉れと云ふ相談があつた時、それを引受けた事はあるが私が社長になるなどと云ふ話は間違ひだつた。

で、私は鏡花君にその訳を話してやつた。まあそれで鏡花君の用談は済んだ訳ではあるが私は前述した様な事情で君に親しみを感じてゐたので君を引

留めた。

() 内は原文

との内容である。長島隆二(明治十一年十一月二十九日生、昭和十五年十月八日歿)は、埼玉県出身、帝大法科卒業後、大蔵官僚となり、大正二年に退官、翌三年から昭和十一年まで四期にわたり衆議院議員に選出され、明治末に桂内閣の総理大臣秘書官を務めた縁で桂太郎の三女キヨコと結婚している。文中の「末弟」とは原口春鴻(本名豊秋。生歿年未詳)のことであるが、この箱根訪問に材を得て、後日鏡花は「紅葛」(『中央公論』大正三年十二月)を書くに至る。

なお、鏡花には長島隆二宛の書簡下書が三通(岩波書店版『鏡花全集』別巻の番号26・48・49)あり、うち49は右の箱根行き直後に認められたものと思われる。

大正五年(一九一六) 丙辰 四十四歳

十月 三日付「読売新聞」(七面)の「よみうり抄」に「泉鏡花氏の「ゆかり双紙」は近く春陽堂より出版する由」と報じられた。

【典拠】「よみうり抄」(『読売新聞』大正五年十月三日付・七面) *引用を省く。

【注記】

「ゆかり双紙」は「由縁文庫」の誤り。『由縁文庫』の刊行は、大正五年十月十五日だが、当時の「新小説」巻末の「春陽堂近刊予告」では、九月号のものが最も早く、未刊となった尾崎紅葉の伝記「紅葉記」と並んで、ともに「泉鏡花著」として載せられている。十月号も同じで、十一月号には記載が無く、十二月号の「春陽堂増版」には「^三由縁文庫」とある(須田千里「単行本書誌」岩波書店版『新編泉鏡花集』別巻二、平成十八年一月二十日、では五版、六版、十版が確認されている)。八月号以来広告頁には「泉鏡花氏作」として『鏡花双紙』『鏡花選集』『遊里集』三冊の一頁大の広告が載せられているから、おそらく記者は書名を『鏡花双紙』と混同したのであろう。

新聞広告(『東京朝日新聞』大正五年十一月六日付・一面)には、

文壇唯一の鬼才として推重治ねき鏡花氏の傑作選集なり。収むる処『臬物語』『龍潭』『松風』『夜叉ヶ池』等の小説戯曲合せて十六篇(八百六十頁)。柳暗花明の巷を描いて江戸情調を慾にし、怪奇魍魎の幽界にひそむ魂を象りて人界の真情を活写す。悉く人生の純真唯美ならざるなし。雪岱氏の浮世絵式の装幀恰も舞妓の垂帯に似たり。

とあり、「総羽」二重表紙木状「版」手刷「雪岱氏装」「新活字組八百六十頁」の文字も見える。本書は『鏡花選集』(大正四年六月二十一日刊)から始まった春陽堂版小村雪岱装袖珍本の四冊目であった(のち『友染集』(大正八年一月一日発行)以降、袖珍本の作品集に「鏡花文庫」という名が冠せられた)。

『由縁文庫』については、のちの長篇小説「由縁の女」(大正八年一月—十年二月)を単行本化する際、本書との書名の紛糾を避けて「ゆかりのおんな」を角書にし『櫛笥集』としたこと(「由縁の女」の成立をめぐる)、『泉鏡花素描』和泉書院、平成二十八年七月二十五日)、小村雪岱の表紙絵は集中の「霰ふる」にちなみ、秋草の中の丸橋と橋上の二人連の女人像を描く意匠が柳亭種彦「修紫田舎源氏」第九編の挿絵を典拠とすること(麗しき鏡花本の世界)「別冊太陽 日本のあるところ」167 泉鏡花「平凡社、平成二十二年三月二十二日)をそれぞれ指摘した。

昭和六年(一九三一) 辛未 五十九歳

一月 七日付「東京朝日新聞」(朝刊七面)の「花下に紅葉祭」と題する記事に、きたる十七日、熱海で開催の紅葉祭へ、紅葉未亡人、嗣子夏彦夫妻、江見水蔭、久保田万太郎らとともに来場の予定、と報じられた。

【典拠】「花下に紅葉祭【熱海電話】」(『東京朝日新聞』昭和六年一月七日付・朝刊七面) 第四回紅葉祭は来る十七日例年の通り梅園で満開の花の下に挙行する当日は

未亡人と嗣子夏彦氏夫妻旧硯友社から泉鏡花、江見水蔭、外に久保田万太郎氏等も来場、日大オーケストラが参加して文芸講演会音楽会も開催の予定である

【注記】

前年昭和五年一月十七日に開催の紅葉祭への出席は、すでに「年譜」にも記したが、この年の開催の実際と鏡花の出席については、右予報のみで、確認することができていない。

予報に記された出席者の年齢は、紅葉未亡人（喜久）が鏡花と同じ歳で五十九歳、尾崎夏彦三十一歳、江見水蔭六十三歳、久保田万太郎四十三歳であった。

昭和八年（一九三三） 癸酉 六十一歳

四月 八日の灌仏会に、近所の住人遠藤夫人、すず夫人とともに心法寺の花御堂に詣でた（カ）。

【典拠】「古貉」（『斧琴菊』昭和九年三月二十日）

附言。

今年、四月八日、灌仏会に、お向うの遠藤さんと、家内と一所に、麴町六丁目、擬宝珠屋根に桃の影さす、真宝寺の花御堂に詣でた。寺内に閻魔堂がある。遠藤さんが扉を覗いて、袖で拜んで、

「お釈迦様と、お閻魔さんとは、何ういふ関係があるんでせう。」

唯今、七彩五色の花御堂に香水を奉仕した、この三十歳の、龍女の、深甚微妙なる聴問には弱った。要品を読誦する程度の智識では、説教も済度も覚束ない。

【注記】

「古貉」は、もと「貉市場」の題名で昭和六年七月一日「文芸春秋オール読物号」

（二年四号）に発表、のち『斧琴菊』に収録された。典拠の「附言」は初出には無く、単行本収録の際の加筆であるので、文中の「今年」を刊行の前年、昭和八年のことと推定して立項した。引用は、冒頭部分のみ、このあと五倍以上の分量がある。

「真宝寺」は「麴町六丁目」には無く、同じ音の「心法寺」が麴町十丁目十八番地に実在していたので、本文もそのように記した。『東京明覧』（織田純一郎他編、集英堂、明治三十七年三月三十一日）の「灌仏会」の項に「本所の彌勒寺、茅場町の薬師堂、蔵前の閻魔堂、麴町の心法寺、両国の回向院等最も賑ふ」と出ている。

心法寺は現在、地番が変更になり麴町六丁目にあるが、十丁目から変わったのは『斧琴菊』刊行の四か月後の昭和九年七月一日であり（『麴町区史』昭和十年三月三十一日）、典拠文に「六丁目」とあるのは、鏡花の記憶違いであろう。寺名の表記の異なるのも訝しいが、同様のことと思われる。しかし「附言」もまた小説の一部であると考えらるなら、実際と齟齬があっても差し支えないわけである。

同行した「お向うの遠藤さん」は、久保田万太郎「もみぢの賀」（『図書』五十号、昭和十五年三月五日）の「二階の手摺」の末尾にも「町内の遠藤夫人」として出てくる近所の住人である。

昭和十四年（一九三九） 己卯 六十七歳

四月 月末、東宝映画から依頼を受けた久保田万太郎は、番町の書齋で自ら脚色した「歌行燈」の一節を聞かせ、その上演の許諾を得た。

【典拠】久保田万太郎「もみぢの賀」（『図書』五十号、昭和十五年三月五日）

屏風

国貞ゑがく「田舎源氏」の表紙の絵を貼りませた屏風。

あの屏風ほど先生の書齋に合ったものはない。

といふことは、あの屏風、先生の書齋に立てられてはじめて生き、あの屏

風をえて、あの書齋、はじめて先生の書齋らしい精気を生じた。

去年の四月の末だった、わたくしは、先生の書齋で、わたくしの脚色した『歌行燈』の一節を聞いていた。そのあとで葡萄酒を御馳走になった。とくに奥さんがカステラを切つて来て下さった。……カステラを天下の美味と珍重することによつて、わたくしは、わづかに先生の信任をつなぎえてゐたのである。……

が、それがあの屏風のまへにわたくしのすわつた最後の、それっきり、わたくしは、先生の書齋に入る機会をもたなかつた。

なぜなら、

そのあと間もなく、先生、階下にお寐みになつたきりになつておしまひだつたから……

それにしても、

わたくしをしていはしめよ、

あの屏風のもついろけこそ先生の芸のいろけだった、妖気だった、秘密だった。……

【典拠②】久保田万太郎「後記」『歌行燈その他』小山書店、昭和十六年一月十七日

歌行燈——

わたくしに泉鏡花先生のこの名作を脚色する機会を与へてくれたのは東宝映画である。東宝映画は早くからこの名作の映画化を企て、その方法として、まづ以てわたくしにこの作の戯曲化を交渉して来た。直接、原作から、映画台本をつくりだすよりも、間接に、わたくしの解釈の入つた脚色に拠つたはうがいくらかでもそのあひだの困難をすくなくすることが出来るだらう……さう思つての上と聞いた。

わたくしは先生の御意見をうかゞつた。先生はやつてもいゝといつて下さ

つた。そこでわたくしは、早速、名古屋の寺田栄一君に桑名へ連れて行つてもらつた。そして、原作の湊屋そつくりの船津屋といふ宿屋の、揖斐川に面した一室で、土地の老妓に、「桑名の殿さん時雨で茶々漬」だの「桑名名物ストドコドンの石取まつり」だの、いろいろ古い唄をきかせてもらつたりした。三月ほどしてわたくしの脚色は出来上つた。幸ひに、その脚色は、二三のこまかい直しだけで先生を及第した。……が、それが……その原稿を御覧に入れに出たのが、番町のお宅の二階で、健康な、元気のいゝ先生にお目にかゝつた最後だった。……それから間もなく、先生は、暑気あたりでおやすみになつた。……そして、そのまゝ、九月、残暑の強い午後、お亡りになつた……

今年の四月、わたくしは、日本評論にこれを発表した。と、七月、新生新派が明治座に上演したいといつて来た。その機会に、再度、桑名へ行つたりして、かなりの加筆を施した。こゝに収めたのは、それである。

この上演にあつたつのおもなる役割をしるせば

恩地喜多八（花柳章太郎） 恩地源三郎・宗山（大矢市次郎） 辺見雪叟（伊志井寛） お三重（森赫子） うどんやの亭主（吉岡啓太郎） うどんやの女房（瀬戸英一） 按摩（村田正雄） 次郎蔵（柳永二郎）

なほ、東宝映画のはうの話はまだそのまゝになつてゐる。

【注記】

典拠①の掲載誌「図書」は、この月から配本の始まつた岩波書店版『鏡花全集』のための特輯号で、谷崎潤一郎「純粹に「日本的」な「鏡花世界」」以下、鍋木清方「思ひ出今昔」、里見淳「泉先生」、水上瀧太郎「覚書」、寺木定芳「南榎町・神楽坂・逗子」、佐藤春夫「鏡花先生追慕断片」、小村雪岱「初めて鏡花先生にお目にかゝつた時」、濱野英二「文字と先生」を収め、久保田文はその掉尾、「二階の

手摺「屏風」「唄」の三章より成る。収録各文タイトル上のカットはすべて小村雪岱筆である。

逝去の年昭和十四年は、これまで「湯島詣」と緇交ぜにされて、単独の上演をもたなかった「三枚続」の上場（明治座、十月一日―二十五日）が久保田の盡力により具体化しているが（「年譜」補訂（十四）参照）、あくる年の「歌行燈」もまた同様の流れと捉えうる。

「歌行燈」の上演については、大正六年ごろに喜多村緑郎が喜多流能楽師金子亀五郎の指導を受けるべく企図したが、金子の急逝もあってこれを果さず、昭和十年十二月ラジオの彼単独の朗読放送が実演の最初であったことを「年譜」および「年譜」補訂（十七）に記した。しかも、このラジオ放送では、立会った鏡花自身の「女の件で少々芝居気を出してくれとの注文」により時間が押して、最後の二章の大詰を局のアナウンサーがまとめざるをえない仕様となり、鏡花喜多村ともども不本意のものであった。舞台での初演、さらに映画化は鏡花の歿後に、喜多村ではなく、弟子の花柳章太郎によって実現したのである。

原作発表から上演、映画化にいたる様相に関しては、すでに関礼子氏「泉鏡花『歌行燈』の上演性―交差する文学・演劇・映画―」（『中央大学文学部紀要言語・文学・文化』一―三号、平成二十六年三月十日）に詳しくたどられているが、なお経緯の捕捉に余地も残っている。舞台化・映画化の過程につき別稿を準備中だが、現時点で整理したところを、年表風にまとめておきたい。

典拠となる資料は、以下の十四点、事項記載の末尾にこれを数字で略記して示すことにする。

[1]「脚本審議会に持ち出す／新派側四狂言極る」『読売新聞』昭和十四年三月十日付・夕刊二面。

[2]「新派『鏡花』を失ふ／悲しみ嘆く喜多村緑郎／来月『歌行燈』を上演」『都

新聞』昭和十四年九月九日付・朝刊七面。

[3] 久保田万太郎「もみちの賀」『凶書』五十号、昭和十五年三月五日。

[4] 「お蕎麥一杯半を／桑名で無理食ひ／伊藤憲朔氏が苦心のスケッチ」『読売新聞』昭和十五年七月六日付・夕刊三面。

[5] 演劇「歌行燈」新聞広告「読売新聞」昭和十五年七月十四日付・朝刊六面。

[6] 久保田万太郎「後記」『歌行燈その他』小山書店、昭和十六年一月十七日。

[7] 久保田万太郎「歌行燈脚色に関する件」『鏡花全集月報』二十号、昭和十七年五月。のち『歌行燈』脚色』と改題して『だれにいふともなく』演劇文化社、昭和二十二年二月十日、に収録。

[8] 映画「歌行燈」新聞広告「東京朝日新聞」昭和十八年一月二十八日付・朝刊

四面／「読売新聞」昭和十八年二月二十三日付・夕刊二面。

[9] 「歌行燈」で合演「読売新聞」昭和十八年一月三十一日付・朝刊四面。

[10] 花柳章太郎・柳永二郎・大矢市次郎・伊志井寛・山田五十鈴「ロケ記『歌行燈』つづれ五人集」『映画』三巻二号、昭和十八年二月一日。

[11] 川口松太郎「役者」『小説新潮』十九巻十一号―二十巻一号、昭和四十年十一月一日―四十一年一月一日。のち『役者―小説花柳章太郎』講談社、昭和四十一年一月二十日。

[12] 森岩雄『私の芸界遍歴』青蛙房、昭和五十年二月二十七日。

[13] 大江良太郎『家 久保田万太郎先生と私』青蛙房、昭和五十年十一月十五日。

[14] 斎藤忠夫『東宝行進曲 私の撮影所宣伝部50年』平凡社、昭和六十二年二月二十三日。

右にもとづき、上演の経緯を映画の封切までに限ってまとめてみる（元号の昭和を略す）。

十四年正月カ 東宝映画の森岩雄は久保田万太郎に「歌行燈」の脚本化につき

相談した。〔6〕〔10〕〔12〕その後、鏡花に脚色の可否を伺い、諒承を得た

久保田は、寺田栄一の案内で桑名に赴き取材をした。〔6〕

十四年三月 新派「更新会」内の脚本審議会は上場演目の一つに「歌行燈」を

選び、松竹側に答申した、と報じられた。〔1〕

十四年四月末 久保田は出来上った脚本の一部を鏡花に読み聞かせ、二三の手

直しだけで及第、六月に完稿させた。〔3〕〔7〕

十四年九月七日 鏡花逝去。

十四年九月九日 喜多村緑郎は鏡花の追悼談話で久保田脚本の完成と、翌月の

明治座上演予定のことを語った（が翌月の上演は無かった）。〔2〕

十五年二月 久保田は「歌行燈」の脚本を改削した。〔6〕

十五年四月一日 久保田は「日本評論」に「歌行燈」を発表した。その後、大

江良太郎は森岩雄を訪ね、映画に先行する舞台上演の許可を得た。〔13〕

十五年六月カ 久保田は装置担当の伊藤憲朝とともに桑名に赴いて取材し、「日

本評論」掲載のものに加筆して上演台本を作った。〔4〕〔7〕〔13〕

十五年七月一日 明治座で花柳章太郎を中心とする新生新派の「歌行燈」が「泉

鏡花追悼狂言」として上演された。〔5〕 本公演はこの年の「演劇文化賞」

を受賞した。〔13〕

十五年十二月 久保田は自作の成立経緯を語り「東宝映画のはうは話がまだそ

のまゝになつてゐる」と記した。〔6〕

十七年四月 久保田は、頓挫していた映画化の話の「こゝへ来てその企画の芽

があらたにふきかけてゐる」ので「この秋位には何とか恰好がつくかも知

れない」と述べた。〔7〕

十七年十月末 東宝本社で映画「歌行燈」の本読みがあった。〔10 伊志井〕シ

ナリオは川口松太郎が書いたという。〔11〕 その二三日後、新生新派と関係

者が東宝砧撮影所へ参集し打合せを行った。〔10 伊志井〕

十七年十一月七日、伊勢古市（あぶら屋旅館泊）、二見浦等でロケーション撮

影をした。〔10 伊志井〕〔14〕

十七年十一月二十一日 砧撮影所のセットに入り藤屋旅館の場を撮った。〔10

伊志井〕

十七年十二月二日 伊豆長岡でロケーション撮影をし、大和館に泊った。〔10

伊志井〕

十七年十二月三日 同地の山田屋に移った。〔10 伊志井〕

十七年十二月四日 小雨で撮影は中止となり、花柳と山田は仕舞の稽古に専心

した。〔10 花柳〕

十七年十二月五日 沼津の千本松原でロケーション撮影をした。〔10 花柳・柳

十八年一月三十一日 きたる三月東京劇場における新生新派と劇団新派の合同

公演の演目に「歌行燈」との報があった（が上演は実現しなかった）。〔9〕

十八年二月一日 映画「歌行燈」が東宝・新生新派提携作品として紅系映画館

で封切られた。〔8〕

それぞれの典拠の校勘は別稿において示すことにしたいが、おおまかな流れと

しては、まず東宝の映画化の企画があり、久保田万太郎に脚色の依頼があつて、

生前の鏡花もこれを諾したが、上演の実現は歿後となり、上演のメンバーにより

映画化が成つたのであった。右の経緯には昭和十六年に空白があるなど、なお不

明なところも残っているので、後考を俟ちたい。

「歌行燈」の舞台初演が成つた昭和十五年は、新派の「鏡花もの」上演史の中で

も特記すべき年である。歳末の回顧評に「いさゝか鏡花に憑かれた形がある」（無

署名「演芸出納簿」）「都新聞」昭和十五年十二月二十六日付・五面）と言わしめたごとく、

東京では二月の「日本橋」を皮切りとして、三月に「通夜物語」（明治座）と「瀧

の白糸」(東京宝塚劇場)、五月「婦系図」(明治座)、七月に本「歌行燈」(明治座)と「白鷺」(新橋演舞場)、十月「風流線」(明治座)と、同月の競演が二回、実に七つの演目の上場があった。これに四月の大阪中座、六月の名古屋御園座、同月の九州中国巡演(中津・熊本・博多・小倉・下関・広島)の「つや物語」を算えれば、全国で優に十を越える興行があったことになる。この中の五作(「日本橋」「通夜物語」「婦系図」「白鷺」「風流線」)には、かつての三頭目のうち昭和七年に伊井蓉峰を欠いた喜多村緑郎(当時七十歳)と河合武雄(同六十四歳)が揃って一座している。前年十四年が「白鷺」(二月・明治座)と「三枚銃」(十月・同)の二作のみであったのに比してめざましく、「歌行燈」のように「鏡花追悼」を謳わぬまでも、創立五十年祭(十二年三月)から三年を経て、花柳の一座の名に象徴される新派の「新生」が往時の「独参湯」たる「鏡花もの」上場にかけられていたと言えようし、就中「歌行燈」初演は旧来の「鏡花もの」に新面目を加えるものだったと考えられる。

ただし、「歌行燈」は明治座の舞台初演以降、東宝の映画化をはさみ、東京では昭和三十五年三月新橋演舞場公演までの二十年間、再演が確認できておらず、この点についても別稿で検討することにした。

〔付記〕

本文中にお名前を記した方々のご教示のほか、資料の調査に関しては、国立国会図書館、日本近代文学館、青山学院大学図書館、本学図書館近代文庫のお世話になった。併せて深謝申し上げる。

(よしだ まさし 日本語日本文学科)